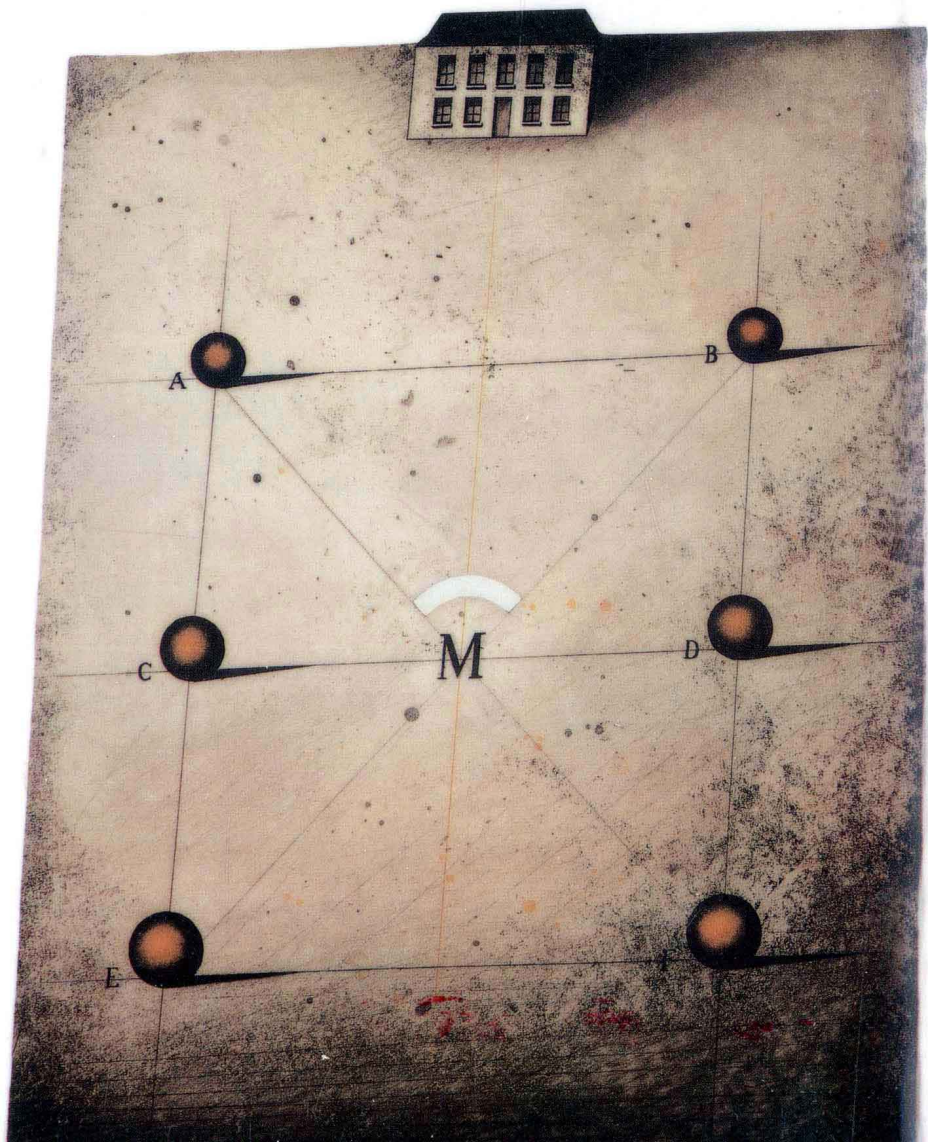


壇の中の世界

La Botella und andere sonderbare Geschichten/Kurt Kusenber

クルト・クーゼンベルク

前川道介・三宅晶子・竹内節訳



CONTEMPORARY
WRITERS



文学の冒険

壇の中の世界

La Botella und andere sonderbare Geschichten/Kurt Kusenberg

クルト・クーゼンベルク

前川道介・三宅晶子・竹内節訳

国書刊行会

壇の中の世界

La Botella und andere sonderbare Geschichten

1991年10月15日初版第1刷発行

著者 クルト・クーゼンベルク

訳者 前川道介/三宅晶子/竹内節

装画 フリードリヒ・メクゼーノパー

装幀・造本 坂川栄治(坂川事務所)

発行者 割田彌雄

発行所 株式会社 国書刊行会

東京都豊島区巢鴨3-5-18 郵便番号=170

電話=03-3917-8287 振替=東京5-65209

印刷所 ㈱キャップス+セイユウ写真印刷株式会社

製本所 田中製本印刷株式会社

ISBN4-336-03060-X

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

目次

生き急ぐ	97
休まない弾丸	92
授業	83
どなた？	74
抱き合せ販売	69
ニヒリート	63
秩序の必要性	59
裸の男	49
巨人	38
トルコ人	30
蒼い夢	13
壘	7

不思議な部屋 101

汽車を乗り間違えて 109

優雅な泥棒たち 121

黒人の料理女 130

森の人々 141

竜 152

魔法の扇子 162

スイミン・スクール 172

最後の一筆 185

*

クーゼンベルクの世界 三宅晶子

199

樓
の
中
の
世
界

壘

あとで、たいへんな量をいれることになった壘を飲みほしたのは、年老いた船長そのひとだった。大体、その日はなにかと仕事の多い日だった。船長は夕飯のすぐ前、つまり予定の時刻に、ささやかな自宅のペンキを塗りおえた。航海へ出かけなくなってからというもの、自宅のペンキ塗りをよくやっていたが、今日ほどよくできたことはなかった。その小さな家は、再び淡い緑色となった。しかし傑作は、なんといっても黄と茶が対照するように塗られた窓枠だった。その緑と黄と茶の三色が映りあうさまは、かのヴァイキングたちさえ、その船をこれ以上に美しくは塗れなかっただろうと思われた。太陽もこれに気づいたのか、ふだんよりながくこの輝く三和音を照らしていたので、船長は上々の御機嫌で夕飯を平らげた。

人間というものは、いったん満足すると、もっと満足したくなるものだ。そこで船長は

園亭にみこしをすえた。そしてほんのすこしだけ手のつけてあったアラクの壘から、小さなグラスについては飲み、ついでは飲みしたあげく、とうとう壘のアラクが、すっかり船長の体内へ移動してしまふことになった。そして壘が壘本来の任務を果たして空になったとき、あらたな行動意欲が船長をとらえた。彼は、いままでアラクの壘にしこまれたことがないほど綺麗なモデルシップを、この空壘の中へしこんでやろうと誓ったのだった。さらに船名を「ヘルナ」とすることも決めていた。その理由は遠い昔にさかのぼることだったが、別にそれが船長の手を休めさせるようなことはなかった。なにはともあれ、老船長は壘の頸をつかみ、ふらふらするのでゆっくりと、寢床が待っている淡い緑色の家へ歩いていた。

それから二、三週間、船長は自分の誓いを果たすのにかかりつきりだった。まだ遠眼のよく利く眼に眼鏡をかけて窓辺にすわった船長は、ほのかなアラクの香りのする壘の中へ、辛抱強く、湿ったパテをつめこんでいた。彼のごつい手のなかのヘラが、陸と海とを分けた。海は緑色に染められ、白い波頭がつけられ、がっしりした海岸のうえには、同じようにがっしりした建築物が次第に伸びあがってきた。その建築物というのは、ありとあらゆる恰好をした家屋と風車、教会がひとつずつ、それに異国風だが、なかなか効果をあげている尖塔が一本だった。建築物の間には、棕櫚の木がはえていた。ここに建てられた町

は、どこか南方の町だったからだ。複雑な細工の三本マストのスクーター船「ヘルナ」号は、まず壘の外ででき上った。それがマストをたおし、壘の頸からさしこまれ、海面に泛び、港の入江に錨をおろし、マストをまたそびえさせたとき、この細工は完成した。船長はこれにコルクの栓をつめ、そこに注意深くタールを塗って、飾り棚においた。彼がこの壘細工の製作者であり、所有者であることは、たしかだった。しかしこの物語では、船長の姿はここで消え失せるのである。

以下の出来事は、どこか南方の小さな海港で起ったことだが、その港の正確な位置はわからない。いずれにしても、本当にちっぽけなこの町の周囲は、静かな入江の岸になっていた。その入江は細長く、入口にあたるところが狭くなっていたので、ラ・ボテリヤ、われわれの言葉でいえば、壘という名前がつけられていた。町のひとが、〈壘の頸〉と呼んでいる港口を見れば、中型以上の船がこの入江に投錨することはめつたにないことは、明らかであった。しかしある日のこと、一艘の堂々たる三本マストのスクーター船が、ラ・ボテリヤ湾へはいつて来て、さも長期滞在しますというように、念入りに錨をおろしたのである。果してポートで上陸して来た船長は宿屋に泊りこんだ。船長は社交家だった。それにボテリヤの人々は、外国人を見る機会がすくなかったので、上流の市民たちと船長の間に、たちまち心のこもった交際が始まることとなった。船長の船が「ヘルナ」という名

前であることは、船が投錨するまでに早くも知れわたっていたが、その船が船長の設計になり、ある程度まで彼自身の手で建造されたこと、へエルナとは、彼最愛の婦人の名をとってつけられたというようなことは、あとでわかったことだった。またあとで、正確に言えば、船長が毎晩この町の友人たちと催していた宴会が果てるころ、彼がこのラ・ボテリヤから、最愛の婦人に求婚するために、どこへも寄らず故郷へ帰るつもりであることもわかった。たしかに酒をものの十杯も飲んでからだったが、彼はこの素晴らしい計画について語った。いや町中が語った。町の人々は、この勇ましい海の男とひとつになって、この計画を賞めそやし、彼が選んだ婦人の前へ進み、結婚を申し込む瞬間を思いえがいてみるのだった。ドンナ・エルナが、その名にちなむスクーナー船の半分も美人でないとしても、船長は三国一の果報者だという評判だった。こうしていつたて自然にドンナ・エルナは、この町で地上の美の権化ということになった。お金持で少タイカれているベドロ・ペレイラは、そこで闇商売をやって現在の財産をつくりあげたあのコンスタンチノーブルの風景を思い出して、自宅の庭園に細長い尖塔^{ミナレット}を建てさせ、バステルで、ドンナ・エルナという未知の美人の肖像を描いたが、この絵は市民たちから大いに賞めそやされたものであった。

かくて時が過ぎていった。どれほど長い時がたったかは、ある日、へエルナ号の船腹が、まるで珊瑚礁のように、びっしり貝でおおわれているのを、船のコックが発見したこ

とても明らかであった。コックは、ただちに上陸して船長に報告した。それを聞きはしたものの、船長はすぐ忘れてしまった。風車の持主ロベスと重要な用件について懇談していたからだ。だが船長もロベスもその用件の糸口を忘れてしまっていた。そのため話はいっこう発展しようせず、繁殖を続ける貝とは反対に、一箇所に停滞したきりだった。

船長は、毎晩、求婚行は迫ってくる、いやもう目前になったといい、彼と一心同体の市民たちもそう思いこんでいた。ひどく天気よかったある晩、船長が一壺のアラクを飲みさえしなかったならば、この状態はもっと続いていたはずである。その壺は、ほんのすこしばかり手がつけてあったが、船長が平らげてしまったのだ。

この酒は船長に著しい影響を与え、彼を行動意欲で一杯にした。彼は立ちあがると大声で、今夜中に錨をあげ、求婚行に出るときっぱり誓った。ラ・ボテリヤの人々は、悲しんだが、この決心をもっともだと思った。一同は、船長の健康を祈って飲み続け、この求婚者がもうそれ以上飲めなくなったとき、波止場までぞろぞろと送っていった。船長はボートに乗ると、力強くオールを漕いで、港の暗闇のなかへと消えていった。

この夜、船長の友人たちは、大いに飲んでいたので、ぐっすり寝こみはしたが、不安な夢におそわれ、風にはためく帆の音を聞き、船長が誇らしげな船に乗って、遙かな恋人のもとへ、矢のように飛んでいくさまを夢に見た。つまりこの夜、かれらはそれまで何百回となく想像していたことを、実際に見たのであった。朝とならない夜はない。ラ・ボテリ

ヤでもしかり。市民たちが、ねむい眼をこすって、空っぽのはずの港へ悲しい一瞥を投げたとき、三本マストのスクーナー船「ヘルナ」号が、出帆なんて考えたこともないというように、落着きはらって横たわっているのを見出したのである。

船長がまた上陸して来た。そして港湾から抜け出そうと一晩やってみたが、——ここでもうまい洒落をいった——誰かが「壘の頸」に栓をつめ、タールを塗ったに違いない——どうしても出港することができなかつたと語った。これで一同大笑いをして、また宴会となったが、この宴会が何度もくりかえされることになったのはいうまでもない。かくて万事がもとどおりとなり、「ヘルナ」号は、どこの暗礁より多くの貝をくつつけることとなった次第である。

生きとし生けるものは被っている外皮かわの外へは出られないものなのだ。

（前川道介訳）

蒼い夢

太陽がのぼった。光線はまだ若々しく銀色で、のぞきこんでも目を痛めないほどだった。いたるところで光はきらめき、歓びを生み出していた。一本の光線が山腹の高いところにある城にむかって突き進んでいた。そして鎧戸の隙間や丸い窓ガラスから侵入し、図々しく可愛い騎士の令嬢の寝室のなかまで飛びこんできた。

愛らしい令嬢はまどろんでいた。頭は雪のなかに咲いている花のように亜麻布のうえで休らい、吐く息は朝のそよ風のようにだった。光線はちらちらしながら、ベッドの天蓋を飾っている金糸で編んだ百合の花に手をのびし、きらめかせた。グードゥラはそれで目が覚めた。ふと眠りから覚めたかと思うと、目を開け、そしてまた閉じた。夢かうつつかわからなかったのだ。あのかたは、あの美しいかたはどこかしら。わたしがたったいま愛情をこめて抱きしめ、接吻すると、接吻を返してくれたあの素敵なかたは。令嬢の心にはその

男の姿がはっきり焼きつけられていたし、耳には男の名前が甘くいつまでも鳴り響いていた。

グードウラは飛び起きて、ほんの少しばかり水で身体を洗い、急いで服を着た。丁寧になんども洗うようなことはしたことがなく、申しわけにちよつと湿らす程度ですませていた。それというのも令嬢はいつも清潔にしているように見えたし、ことのほか香ぐわしい匂いを放っていたからである。あつと思う間もなく、グードウラがドアからさっさと出ていってしまい、これには光線もがっかりしてしまった。てっきり令嬢が鑑戸を開け放って明るい朝を迎え入れてくれるものとはかり思っていたのだ。光線はむつとして金糸で編んだ百合の花のむこうへ這っていったが、若い娘たちのことを恨めしく思っている孤独な光線だった。

グードウラは小走りにいくつも廊下や階段をとり、北の塔へと急いだ。そこには伯父のルッペルトが住んでおり、星を献身的に崇め、数々の知恵を授かっていた。この百歳の老人は正確にはグードウラの大伯父だったが、父親やそのまた父親が呼んでいたように、グードウラも伯父と呼び、老人はそれで満足していた。

「どうしてこんなに朝はやく、わしのところへきたのかな」とグードウラが入っていくと、老人はびっくりして言った。

「夢のせいなの、ルッペルト伯父さま」と少女は答えた。「眠っているときに男のかたが